

# 益田市内石造物調査概報 4

—須子町屋加田遺跡付近および飯田町の石造物群—



令和5（2023）年3月  
益田市教育委員会

## 例 言

1. 本書は、益田川・高津川下流域寺社調査事業、河口域関連史料調査事業の一環として実施した益田市須子（すこ）町イ549-1及び飯田町域に所在する石造物調査の報告書である。
2. 本書に係る調査の経過は以下のとおりである。  
令和元年度 石造物の石材鑑定  
令和3・4年度 石造物の拓本、調査、実測、撮影
3. 調査は次の組織で実施した。  
**事務局** (令和元年度) 木原光 (文化財課課長)、山本浩之 (同課長補佐)、長澤和幸 (同主幹)、  
中司健一 (同歴史文化研究センター主任)  
(令和3・4年度) 山本浩之 (文化財課課長)、長澤和幸 (同課長補佐)、松本美樹 (同主査)、中司健一 (同歴史文化研究センター主任)  
**調査指導者** 西尾克己 (元島根県古代文化センター長)  
中村唯史 (島根県立三瓶自然館サヒメル企画情報課調整監)  
**調査員** 木原光 (文化財課会計年度任用職員)、佐伯昌俊 (同主任主事)、中司健一
4. 実測図・写真・拓本は益田市教育委員会文化財課 (益田市常盤町1-1) で保管している。
5. 調査を許可いただいた所蔵者、ご指導いただいた西尾克己氏、中村唯史氏にお礼申し上げます。
6. 石材については、中村氏からご教示いただいた。
7. 石造物の実測・トレースは、西尾氏の指導により木原・佐伯が、石造物の拓本、本書の執筆・編集は中司が行った。
8. 表紙の写真は須子町屋加田<sup>やかた</sup>遺跡付近の石造物群である。

## 第1章 調査の目的及び調査地の概要

### 第1節 調査の目的

益田市須子町及び飯田町は、中世の高津川下流域に展開した荘園・長野荘を構成する地域である。長野荘は、「庄内七郷」と呼ばれた高津・須子・角井・吉田・安富・豊田・横田の各郷と、飯田・虫追などの高津川沿いの平地や、白上・俣賀・梅月・美濃地・黒谷などの山間部の各郷により構成されていた。飯田郷は長野荘の本郷と考えられることが近年指摘されている。

長野荘では、豊田・横田に内田氏、俣賀などに内田氏の一族である俣賀氏、安富に安富氏といったように、各郷に小領主が割拠し、それが室町時代まで続いた。南北朝時代以降、東の益田荘の支配を確立した益田氏が長野荘にも影響力を持ち始め、戦国時代までに益田氏の支配下におさめられていく。

長野荘は、中世には中小規模の領主が割拠していた地域であり、領主間の関係をうかがうことができること、また、内田氏・俣賀氏は西遷御家人として新たに移ってきた領主であるため、地域に支配をどのように浸透させようとしたかを考察することができること、そして古文書や絵図、現地の景観、伝承等、これらを検討するための材料が豊富に存在することから、平成28年度から平成30年度まで国立歴史民俗博物館の共同研究「中世日本の地域社会における武家領主支配の研究」(研究代表者:同館准教授田中大喜氏)の基軸事例に位置づけられ、文書調査、出土遺物調査、聞取調査、現地調査等が実施された。須子町の石造物群も、この共同研究の現地調査により発見された。

本書は、この共同研究の成果を踏まえ、また、その一助となること、それにより中世高津川下流域の実態解明に資することを目的の一つとし、石造物の基本的な情報(形状や石材等)を紹介する。

## 第1節 調査地の概要

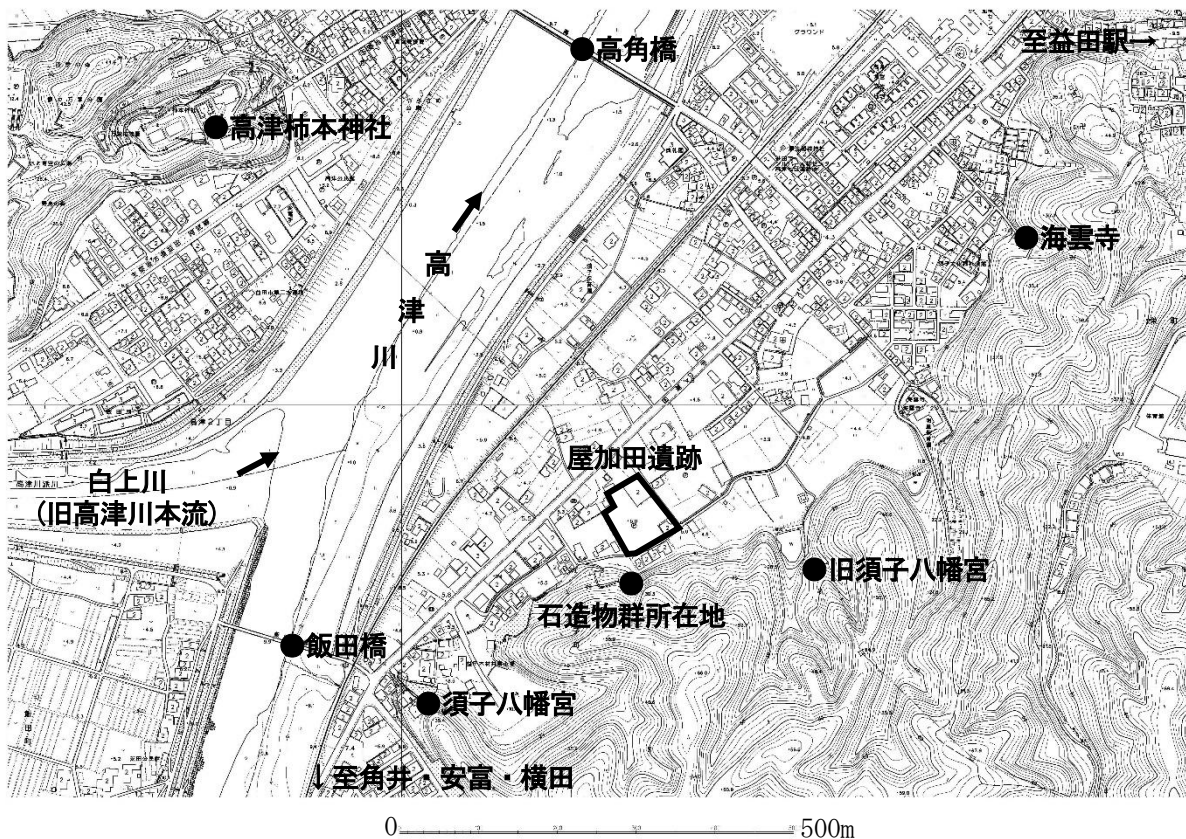
益田市須子町は、一級河川高津川の下流域の右岸に位置し、中世には荘園・長野荘を構成する郷のうち、須子郷及び角井郷に相当する（須子がイ番、角井がロ番である）。

益田市飯田町は、須子町の南西方向に位置し、現在の高津川本流と白上川・派川に挟まれた地域と、白上川の北側の<sup>つづし</sup>が町域である。中世の荘園・長野荘を構成する郷のうち、飯田郷にほぼ相当する。白上川により分断される両地域であるが、同じ町であることは経済的な結びつきの強さを推測させる。

須子町と飯田町の間で高津川本流と白上川が合流するが、中世においては、現在の白上川と飯田町の西側の派川が高津川の本流であったと考えられている。

須子郷の歴史を概観する。暦応3（1340）年に俣賀致義が弘安3（1282）年の譲状どおり「須子村内田屋敷」を安堵され、康永3（1344）年頃には俣賀氏と覚融庵主との間で「須子女し(子)分」が争われている（「俣賀文書」9、12、13号）など、俣賀氏が須子に権益を保持していたことがわかる。永徳元（1381）年には須子駿河次郎が角井村の領家職を宛行われており（「閩閩録」巻121周布289号）、須子と角井にまたがって勢力を持つ領主がいたことが知られる。戦国時代には大内氏や吉見氏の家臣に須子氏が見える（「下瀬文書」、「閩閩録」巻152益成2号、「益田高友家文書」）。また、益田氏の家臣にも須子氏がいた可能性がある（「松江八幡宮文書」）。関ヶ原の合戦後、益田氏が益田を去ると、最初は石見銀山領、元和3（1617）年に亀井氏が津和野藩主になると、津和野藩領となる。

本書で紹介する須子町の石造物の所在地は、小字が「古土井」である。所在地の北には小字「屋加田」があり、平成28年度の開発に伴う発掘調査により遺跡が発見された（「屋加田遺跡」）。白磁や青磁、土師質皿、瓦器鍋などが出土したことから平安末から中世（13～15世紀後半）と考えられる遺物包含層からは、溝の遺構が発見され、「須子村内田屋敷」に関わる遺構の可能性があり、注目される。



【図1】 須子町屋加田遺跡付近の石造物群所在地とその周辺図 ※益田市都市計画図をもとに作成



続いて飯田郷の歴史を概観する。元暦元年（1184）に源範頼が藤原兼季・兼高父子に安堵した所領に「飯田郷」が見え（「益田家文書」1号）、貞応2年（1222）に掃部助仲広の非論を退け、飯多（飯田。以下同）郷地頭職を兼季に安堵せよとの関東下知状が出されたことが知られていた（「同」4号）。

近年、長野荘の立荘から相伝に関する研究が進んでいる。西田友広氏によると、長野荘は大治4年（1129）に石見守となったト部兼仲により、待賢門院を本家、兼仲を領家とする荘園として成立したとされ、長野荘領家ト部氏は「仲」を通字とすることから、この掃部助仲広も領家ト部氏の一族の可能性があるとされている。さらに久留島典子氏は、この掃部助仲広と思われる人物の名も見えるこれまで注目されていなかった系図を紹介され、系図の検討から、飯田郷は長野荘の本郷と考えられること、紀氏女からその女子へ相伝された本郷下司職がその子仲広へ伝領され、長野荘に勢力伸長を図る益田氏と対立した結果、貞応2年の相論が生じたと推測されている。

その後も簡単に益田氏領になったわけではないようで、鎌倉時代の間、次のような文書が見られる。宝治2年（1248）、鎌倉幕府は委文宗文に長野庄内白上村半分と飯田郷の地頭職を祖母白上尼の議状どおり安堵している（「益田實氏所蔵文書」9号）。嘉元2年（1304）、某は飯多・市原政所に、源茂国を代官職に任じたと伝えている（長府博物館蔵「筆陳」所収文書）。元応2年（1320）、行忍が四郎左衛門入道に、「飯多・市原両郷奉行」を命じられたことを伝えている（「長府毛利家文書」）。

南北朝・室町時代になると、永徳3（1383）年に祥兼（益田兼見）が兼世（益田兼頭）に、応永5年（1398）に道兼（益田兼頭）・益田兼家が益田兼理に、同22年に兼理がその嫡子益一丸に飯田郷（地頭職）をそれぞれ譲渡しており（「益田家文書」61・95・99号）、南北朝の内乱の過程で飯田郷を支配下におさめたと考えられる。注目されるのは、飯田郷に「加虫追・河関了」（同61号）あるいは「虫追、加関口」（同95号）とあることで、飯田・虫追付近に河関が存在したと、そこでなんらかの通行税の徴収が行われていたことがうかがわれることである。

中世の高津川本流は現在の派川と白上川でと考えられており、廿子と飯田は高津川流通を押さえやすい位置にあったと言える。廿子の対岸にある小字「船戸」や「疋見給」も高津川流通との関連が推測される。

廿子のY家墓地石造物は小字「土井」・「土井之内」の近くに、柴田組石造物は現在の高津川本流と白上川の合流地点に近くに所在する。J家墓地石造物は海老山八幡宮の近くに所在する。同家の伝承では、向横田城や三隅茶臼山城の城主を務めたが、慶長5（1600）年に飯田に移り庄屋になったという。



【図2】飯田町の石造物とその周辺 ※国土地理院地図に加筆。

## 第2章 調査の概要

### 第1節 調査の方法

現地調査にあたっては、調査対象地の石造物の種別・形態・大きさを確認し、石材の鑑定、写真撮影と実測を行った。

### 第2節 須子町屋加田遺跡付近の石造物の概要

【表1】 須子町屋加田遺跡付近の石造物一覧表

番号	形態1	形態2	石材	写真	備考
SY1	五輪塔(残闕)	空風輪	安山岩(角閃石なしピンク)	1	
SY2	五輪塔(残闕)	空風輪	凝灰岩	2	
SY3	五輪塔(残闕)	空風輪	砂岩	3	
SY4	五輪塔(残闕)	空風輪	砂岩	4	縦に割れており、1/2程度残る。 SY15とは同一個体ではない。
SY5	五輪塔(残闕)	火輪	花崗岩	5・6	
SY6	五輪塔(残闕)	火輪	砂岩	7・8	SY7より大きい。
SY7	五輪塔(残闕)	火輪	砂岩	9・10	SY6より小さい。
SY8	五輪塔(残闕)	水輪	黒っぽい安山岩 (日引石の可能性あり)	11・12	
SY9	宝篋印塔(残闕)	相輪	黒っぽい安山岩 (日引石カ)	13	宝珠・請花、九輪の一部。 SY11とは同一個体ではない。
SY10	宝篋印塔(残闕)	相輪	花崗岩	14	宝珠・請花のみ。
SY11	宝篋印塔(残闕)	相輪	安山岩 (日引石の可能性あり)	15	九輪の一部、請花・伏鉢。 SY9とは同一個体ではない。
SY12	宝篋印塔(残闕)	相輪	青野系安山岩	16	九輪の一部、請花・伏鉢。
SY13	宝篋印塔(残闕)	相輪	安山岩(角閃石なしピンク)	17	九輪の中間で折れている。
SY14	板碑	地藏1体	砂岩	18	下部で折れている。
SY15	五輪塔(残闕)	空風輪	砂岩(地元産ではない。山口県カ)	20	縦に割れており、1/3程度残る。 SY4とは同一個体ではない。
SY16	地藏		砂岩	19	上部一部破損。

### 五輪塔・空風輪

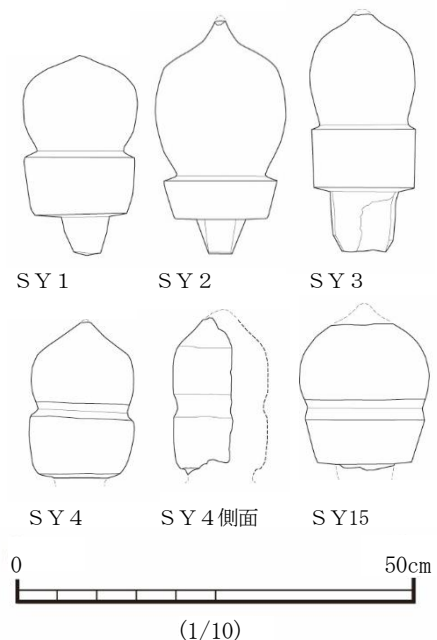
**SY1** 空輪と風輪のバランスが整っている。風輪上部に傾斜を作るが、その側面は直線的に表現される。表面のノミ痕が消され、ホゾの凸部は四面面取りされるなど、丁寧な作りである。ただし、風化している。

**SY2** 空輪を大きく、風輪を低く作る。風輪は上部に傾斜を作るが、側面は直線的である。側面はハツリ後に研磨した可能性がある。ホゾの凸部は面取りされているが、ハツリは粗い。

**SY3** 空輪と風輪のバランスはよいが、空輪を縦長に作り、ホゾの凸部までを含め、全体に縦に長い印象である。また、空輪・風輪ともに側面は直線的に表現される。風輪の上部に傾斜を作り、表面はホゾの凸部を含め全体に丁寧な仕上げである。

**SY4** 縦に割れ、約半分が残る。ホゾの凸部は欠損している。空輪と風輪のバランスはよいが、SY1に比べると縦長である。空輪・風輪とも側面の曲線が表現され、風輪の上部に傾斜を作り、表面の仕上げも丁寧である。

**SY15** 縦に割れており、1/3から1/4程度残る。空輪と風輪のバランスもよく、風輪の上部に傾斜を作る。空輪の側面は曲線で表現されているが、風輪の側面は直線的である。仕上げは丁寧で、ノミ痕が認められないが、部分的に剥落している。



【図3】 五輪塔・空風輪残闕実測図

### 五輪塔・火輪

**SY5** 高さはなく、扁平な印象を受ける。軒端はわずかに外に開き、軒下辺は軒口でわずかに反る。空風輪との接点にのみホゾ穴がある。表面はハツリ仕上げである。

**SY6** SY5よりやや高さがある。軒端はほぼ垂直だがわずかに外に開き、軒下辺は最後まで直線である。空風輪・水輪両方との接点にホゾ穴がある。ハツリ仕上げで、特にホゾ穴内は仕上げが粗い。

**SY7** SY5・SY6より全体に小さいがSY5よりやや高さがある。軒端は垂直で、軒下辺は軒口で反る。空風輪との接点にのみホゾ穴がある。表面は丁寧な仕上げで、ノミ痕は消されているが、ホゾ穴内はハツリ仕上げである。

### 五輪塔・水輪

**SY8** 上部1/3あたりが最大径となり、種子(バ)を彫る。側面の曲線は上下ともに表現されている。火輪・地輪両方の接点は粗いハツリ仕上げである。

### 宝篋印塔・相輪

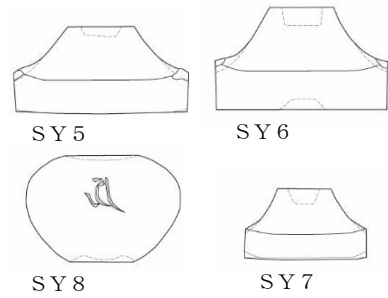
**SY9** 宝珠・請花と、九輪のうち一輪分だけが残る。宝珠の曲線部分、請花の覆輪付き蓮弁、九輪の溝のいずれもしっかり表現されている。石材も安山岩で、日引石ひびきいしの可能性が示されており、日引石製の宝篋印塔の相輪である可能性が高い。

**SY10** 宝珠と請花が残る。宝珠の側面はわずかに曲線が表現され、請花の蓮弁は省略されている。かなり簡略化された相輪である。

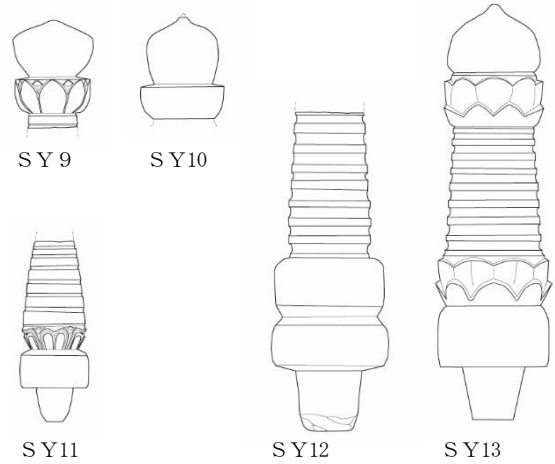
**SY11** 九輪のうち七輪分、請花・伏鉢が残る。九輪の溝は線状に表現されているが、請花の蓮弁は覆輪付きでしっかり表現されている。石材も安山岩で、日引石の可能性があり、日引石製の宝篋印塔の相輪である可能性がある。

**SY12** 九輪のうち七輪分、請花・伏鉢が残る。九輪の溝はしっかり表現されているが、請花の蓮弁は表現されていない。全体に風化している。石材からもいわゆる津和野町の青野山石製(玄表石製)宝篋印塔と考えられる。

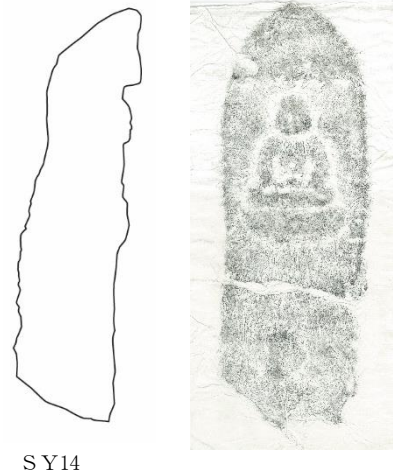
**SY13** 九輪の中間で折れているが、相輪全体が揃う。宝珠の曲線は表現されている。上下の請花に蓮弁が二重の素弁で表現されており、特徴的である。九輪の溝はしっかり表現されている。内田大輔氏によると、鍋山石製宝篋印塔の相輪の特徴は、請花が素弁の二重請花であることと、九輪を三輪のみ作ることを基本とするという(内田2019)。本相輪は素弁の二重請花という点では一致するが、九輪全てが作られている。鍋山石製宝篋印塔だとすれば、かなり丁寧な作りということになる。



【図4】五輪塔火輪・水輪残闕実測図



【図5】宝篋印塔相輪及び相輪残闕実測図



(左)【図6】板碑実測図(側面)

(右)【図7】板碑拓本(正面)



(1/10)



板碑

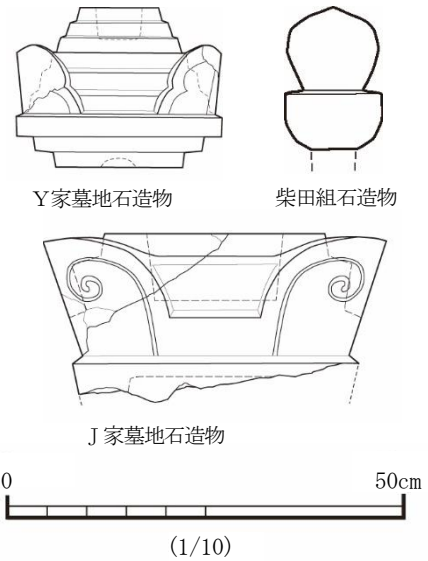
SY14 下部 2/3 のあたりで折れているが、全体が残る。上部 1/6 程度を屋根状に彫り残し、上部約半分に地蔵を一体彫る。下部は粗いハツリ仕上げで、この部分を地中に埋め、建てていたと思われる。

第3節 飯田町の石造物の概要

Y家墓地石造物 (写真 21) 宝篋印塔の笠。石材は花崗岩で磁性あり。隅飾りは2辺を破損。外に傾く。二弧式で輪郭を巻き、平底。段丘は上6段、下2段。

J家墓地石造物 (写真 22) 白色凝灰岩製組み合わせ式宝篋印塔の笠。大田市温泉津町の大畑石と呼ばれるもの。隅飾りは外に傾き、輪郭は本来の意味を失い線状に渦を巻く。上部の段丘は1段。下部は大きく破損する。この石造物について興味深いのは、かつて全体が揃っていた時の写真をもとに、全体像を復元したものが作られていることである (写真 23)。

柴田組石造物 (写真 24) 柴田組が管理するお堂に所在し、地蔵として扱われている。五輪塔の空風輪である。石材は安山岩。空輪・風輪とも一部欠ける。空輪と風輪のバランスがよく、側面はなめらかな弧を描くが、やや空輪が細い印象を受ける。風輪は上部に傾斜を作る。底面がわずかにへこむ。



【図8】飯田町の石造物実測図

【参考文献】間野大丞「高津川上・中流域の宝篋印塔」(『宍道町歴史叢書』1号、1996年)。国立歴史民俗博物館『中世益田現地調査成果概報』Vol.1、2017年。同Vol.2、2018年。西田友広「中世前期の石見国と益田氏」(島根県古代文化センター編『石見の中世領主の盛衰と東アジア海域世界』(島根県教育委員会、2018年)。内田大輔「山口県における石造物使用石材とその様相」(『論集 葬送・墓・石塔』狭川真一さん還暦記念会、2019年)。久留島典子「益田氏系図再考」(『東京大学史料編纂所研究紀要』第29号、2019年)。



写真1 SY1



写真2 SY2



写真3 SY3



写真4 SY4



写真5 SY5 (上面)

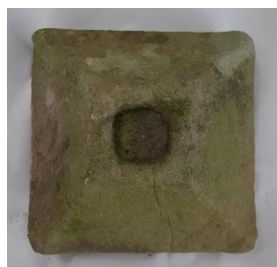


写真7 SY6 (上面)

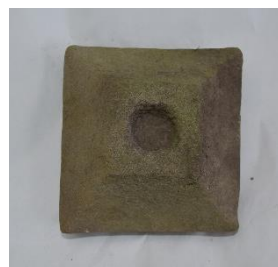


写真9 SY7 (上面)



写真11 SY8 (上面)



写真6 SY5 (側面)



写真8 SY6 (側面)



写真10 SY7 (側面)



写真12 SY8 (側面)



写真13 SY9



写真15 SY11



写真16 SY12



写真17 SY13



写真14 SY10



写真18 SY14



写真19 SY16



写真20 SY15



写真22 J家墓地石造物 写真23 J家墓地石造物  
(平成に花崗岩で復元)

※写真の縮尺は同一ではない。



写真21 Y家墓地石造物



写真24 柴田組石造物

益田市内石造物調査概報4

—須子町屋加田遺跡付近および飯田町の石造物群—

発行・印刷 令和5年3月24日

編集・発行 益田市教育委員会

印刷 株式会社タイピック

(島根県益田市常盤町7番3号)